



大沼野営場の運営管理企画者  
Vol.40 そん みんそく  
宋 旻錫さん

韓国・釜山広域市出身の宋さんは、千歳市に移住して7年になります。大沼フィッシングパーク大沼野営場の運営管理企画者として、運営や管理に日夜奔走しています。来年度から、通年での開設を視野に、野営場の運営に知恵を絞る宋さんを訪ね、スイレンの花が咲き誇る野営場で話を伺いました。

## “ 町民と共に心安らぐ場を提供したい ”

野営場は、今春から、指定管理者の株式会社ダイナックス（千歳市）が担っています。大手自動車部品メーカーですが、令和3年に新領域での事業を創出する新領域創造部を創設。宋さんは、その部署のキャンプ事業室長を務めています。何故、キャンプ事業だったのでしょうか？明確な理由がありました。「韓国では、日本よりデジタル化が進んだ半面、10年ほど前からアウトドア先進地といわれるアメリカやドイツでは、キャンプが文化として定着。魅力ある事業になると感じました」。

道内の主要キャンプ場をくまなく訪ねました。大半が行政による運営で、施設の老朽化や人の手立てなどの課題が見つかりました。「何とか協力できないだろうか」。そんな矢先に、厚真町との運命的な出会いに巡り合いました。札幌市で開かれた第35回ビジネスEXPOです。ブースを出展していた同社の宋さんは、厚真町の出展が気になり、閉幕後に尋ねました。町職員の熱意に感動し、すぐに大沼野営場を訪問。景色や環境に惚れ込み、会社と相談しながら約1年がかりで研究し、指定管理者に応募しました。

大沼野営場まで、千歳市から通っています。韓国の祖母の家と風景が似ています。「田園風景を見ると、幼いころにおばあちゃんの家でたき火を囲みながら栗を焼いて食べたことを思い出します。たまにホームシックになりますよ」。

オレンジ色に染まる大沼の夕景が自慢です。4月のオープン以降、利用したのは約3000人。水面を漂う水鳥、心地よい森、ゆっくりと流れる時間…利用者ほとんどが、「心安らぐ場所」と声をそろえ、何度も訪れます。人との触れ合いを大切にしています。

「町民の皆さんと一緒に、ここにアウトドア文化を根付かせたい。今の私の目標です」。